

令和 6 年度 奨励研究

北広島市と札幌国際大学の連携を通じた学生主導による学びの展開及び地域振興の探索
第 2 報

札幌国際大学スポーツ人間学部

スポーツビジネス学科¹⁾・スポーツ指導学科²⁾

横山克人¹⁾ 平澤芳明¹⁾ 安田純輝²⁾

目 次

I. はじめに	1
I-1. 包括連携協定締結	1
I-2. 北広島市	1
I-3. 札幌国際大学	2
I-4. 短期目標と中長期目標	3
I-5. 2023 年度（初年度）北広島 Project の概要	3
II. 目的	4
III. 研究方法	5
III-1. 調査対象	5
III-2. 北広島 Project が目指すアクティブラーニングの視点に立った取り組み	6
III-3. 調査方法の検討	7
IV. 活動報告	11
IV-1. 北広島市役所訪問	11
IV-2. F.VILLAGE スポーツフェスティバル ブース出展	11
IV-3. 北広島団地地域サポートセンター“ともに”主催「地域の運動会」の企画運営 ...	12
IV-4. ロコモティブシンドロームの調査分析	13
V. 研究結果	14
V-1. 質問紙調査の結果	14
V-2. インタビュー調査の結果	19
VI. 考察	21
VI-1. 質問紙調査の考察	21
VI-2. インタビュー調査の考察	23
VII. まとめ	25
VIII. 今後の展望	26

引用参考文献

I. はじめに

I-1. 包括連携協定締結

札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部と北広島市は、2023（令和 5）年 3 月 29 日（木）に包括連携協定を締結した（北広島市，2023；札幌国際大学 HP，online）。本協定の目的は、包括的な連携のもと、相互の資源を活用した連携を強化することが目的である。連携事項の具体的な事項としては、下記の通りである（表 I-1）。

そこで札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部は、スポーツ人間学部を中心に「北広島 Project」を立ち上げ、上記の目的達成のため 2024 年 4 月から始動した。

表 I-1 包括的連携協定の具体的な事項

- | |
|------------------------------|
| (1) 地域活性化に関すること。 |
| (2) 地域支援に関すること。 |
| (3) 地域人材の育成に関すること。 |
| (4) 産業・学術・文化の振興に関すること。 |
| (5) その他、目的を達成するために必要と認められる事項 |

（北広島市，2023；札幌国際大学 HP，online）

I-2. 北広島市

北広島市は、居住、観光、ビジネスにおける交通利便性と豊かな自然の中での暮らしが共存するポテンシャルがある一方で、急速な少子高齢化、人口減少による活力低下や地区の分散と都市機能の不足、流出が現状課題として挙げている（北広島市，2021）。この諸課題の解決のため、官民連携プロジェクトとしてボールパークを整備することで、北広島市のアイデンティティを高め、居住者や企業立地を促進しながら、持続的な都市経営と社会課題の解決を図る地方都市の再生モデルの実現を目指している（北海道北広島市ボールパーク特設サイト）。所謂、ボールパーク構想である。

北広島市が掲げるボールパーク構想は、北海道のシンボルとして、新たな産業集積、起業促進、消費・雇用の拡大とコンパクトで健康な新たなライフスタイルを展開し、地域の持続的成長である。同市が目指す都市像（「希望都市」「交流都市」「成長都市」と北海道日本ハムファイターズの企業理念（Sports Community）が同じ方向であることを確認し、2016 年 6 月から誘致を促進し始めた（北海道北広島市ボールパーク特設サイト）。誘致活動に力を入れ始めた翌年、スポーツ庁は第 2 期スポーツ基本計画を示した。2017（平成 29）年度から 2020（令和 2）年度の第 2 期スポーツ基本計画の 4 つの方針にスポーツで「人生が変わる」「社会を変える」「世界とつながる」「未来を創る」ことを示している（スポーツ庁，online）。そして、『スポーツイベントは経済効果を生み出すと共に、参加者や観戦者はそのま交流人口となって地域の賑わいの創出を可能にすることから、地域活性化の起爆剤として期待されている。』と報告されていることから、北広島市のボールパーク構想は、スポーツ庁の第 2 期スポーツ基本計画と合致していることがわかる。

I-3. 札幌国際大学

札幌国際大学（online1）は、「自由」「自省」「自立」のもと、自ら考え、自ら行動し、自省する人を教育理念に掲げている。豊かな国際性を身につけ、より深く地域に根差し、これからの時代を支えていくチカラを育む学びを大切にしている（図 I-1）。



自ら考え、自ら行動し、自省する人へ

本学には、いろいろな個性が集まっています。

だから、いろいろなことが学べます。

育てているのは「人と人をつなぐ人」。

豊かな国際性を身につけ、より深く地域に根差し、

これからの時代を支えていくチカラを育みます。

（「教育理念」（札幌国際大学 HP, online1）より転載）

図 I-1 札幌国際大学における「教育の基本的考え方」

そのため、これまでも札幌市や清田区をはじめ、今金町、浦河町、ニセコ町など複数の行政と地域連携を深めるとともに学生の正課外の学びの場として活用していく共同プロジェクトを立ち上げ推進してきた。これらの地域連携共同プロジェクトは、本学の教育理念である「自ら…」学ぶ姿勢の醸成と、より深く地域に根ざす学びの場として最適な環境である。これは、『アクティブ・ラーニング研究 Vol.1』（日本アクティブ・ラーニング学会、2020）や『アクティブ・ラーニング研究 Vol.2』（日本アクティブ・ラーニング学会、2022）に掲載されている数多くの論文で報告されている。

また、「自ら…」学ぶ姿勢は、近年の教育界の言葉を用いると「主体的」や「能動的」と同義語として解釈することができる。『新たな未来を築くための大学教育の質的転換にむけて：生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（答申）』を一部抜粋すると、「学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学習（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である」（中央教育審議会、2012）と提言されている。

中央教育審議会（2012）が示す見解や日本アクティブ・ラーニング学会（2020, 2022）が蓄積している知見からは、地域連携共同プロジェクトによる能動的学習（アクティブラーニング）は、学生の学びを深化させていく上で効果的な手法であり、高等教育機関における地域連携は学生の主体的な学習の場の創出に必要な事業であると言える。とりわけ、地方大学での括りである本学は、地域資源の豊富さと地域に根差した教育環境整備は極めて重要な課題である。

I-4. 短期目標と中長期目標

包括連携協定を締結することにより、北広島市の官民連携に加え、札幌国際大学が有する教育機関の知見や人材提供が可能となり、将来的には民間企業も交えた産学官民が共同するプロジェクトを展開することが目標である。中長期的に産学官民が共同するプロジェクトの展開を目標にする一方で、短期的には本学が有する知見と人材を提供し、北広島市が直面する諸課題について検討することが目標である。そして、これらの活動が産学官民プロジェクト展開の一助となることが将来的な目標である（図 I-2）。

2023 年度（初年度）北広島 Project（以下「北広島 Project 2023」と略す）は、本学が有する人材（学生）の視点から北広島市について文献調査および実地調査を行い、課題の抽出とその課題解決に向けた能動的学習（アクティブラーニング）に着目した（北広島 Project チーム，2024；横山ほか，2024）。

北広島 Project の 2 年目にあたる 2024 年度は、前年度の北広島 Project 2023 の取り組みから得られた学びやノウハウを生かしながら、初年度の反省と課題の整理に取り組んだ。その後、抽出された課題の解決方法について検討を進めるとともに、改めて北広島 Project メンバーとなる学生にとっての課題解決に向けたアクティブラーニングを実践するための学びの場と機会の創出に努めた活動を展開した。

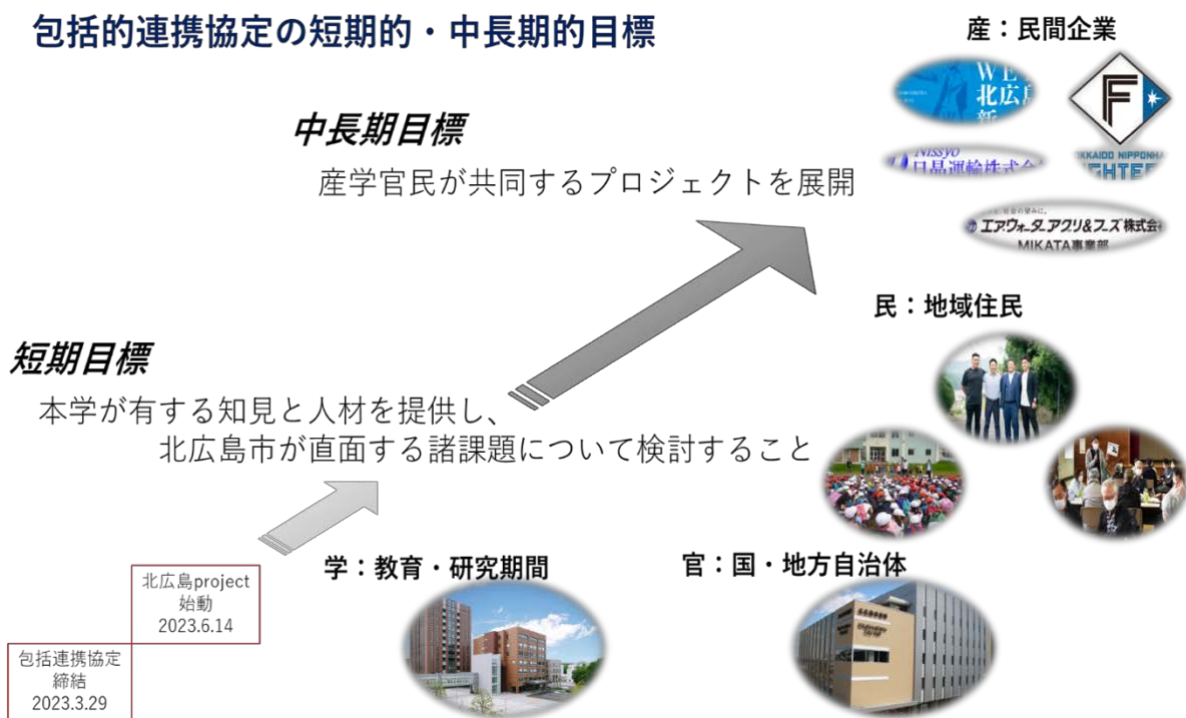


図 I-2 北広島 Project における短期目標と中長期目標のイメージ

I-5. 2023 年度（初年度）北広島 Project の概要

初年度の活動は、学生が能動的学習（アクティブラーニング）を展開するなかで北広島市の活性化、支援事業、人材育成、産業・学術・文化の振興に関する一資料を得ることに

加え、学生の汎用的な能力および課題解決能力の向上を検討することを目的とした。

学生の汎用的な能力および課題解決能力の向上を検討する方法として、アクティブラーニングにおける「技能や態度の育成」と「認知プロセスの外化」について、中央教育審議会（2012）と溝上（2014）の見解を踏まえ、質問紙調査とインタビュー調査に大別して検討を試みた（横山ほか,2024）。

アクティブラーニングにおける「技能や態度の育成」状況は、中央教育審議会（2012）が示す能動的学修を構成する要素（認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験）の変容について検討することとした。そして、データ収集の方策として、質問紙調査法を採用することとした。

アクティブラーニングにおける「認知プロセスの外化」を検証するために、本プロジェクトにおいては、対象学生や関係者へインタビューを実施して、地域貢献事業を通したアクティブラーニングの構造や本質を探索的に検討した。また、インタビュー調査の対象は、プロジェクトメンバーの中から顕著な数値の変容を示したものを学年ごとに1名ずつ抽出し、半構造化インタビューおよび逐語録の作成に取り組むこととした。

学生が能動的学習（アクティブラーニング）を展開するなかで、北広島市の課題調査と解決に向けた活動（定例ミーティング、企画発表、意見交換会、フィールドワーク、共同プロジェクト）から、北広島市に振興に関する資料及び知見を得ることができた。特に、北広島団地地域サポートセンター“ともに”で開催された「冬の運動会」共同プロジェクトは、地域の既存イベントに対する本学が有する人的および知見の支援事業として成立した一例であると考えられる。加えて、北広島市内の地域施設での開催は、北広島市の活性化に貢献したことが考えられる。

また、学生の汎用的な能力および課題解決能力の向上については、質問紙調査の結果を踏まえると、6項目中5項目（①認知的能力、②倫理的能力、③社会的能力、④教養、⑥経験）の数値の向上が確認された。このことから、プロジェクトメンバーの主体的な学びおよび活動に対する自信はある程度の基盤が整っている中でプロジェクトが遂行されていたことが考えられる。

以上のことから、学生の能動的学習（アクティブラーニング）を展開した本プロジェクトの活動が、北広島市の振興および学生の汎用的な能力および課題解決能力の向上に寄与することが示唆された。

II. 目的

本研究は、学生が能動的学習（アクティブラーニング）を展開する中で北広島市の活性化、支援事業、人材育成、産業・学術・文化の振興に関する一資料を得ることに加え、経年的に学生の汎用的な能力および課題解決能力の向上を検討することを目的とした。

Ⅲ. 研究方法

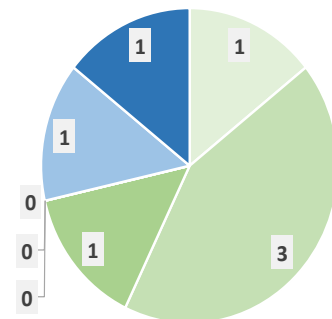
Ⅲ-1. 調査対象

調査対象者は、2024 年度北広島 Project（以下「北広島 Project 2024」と略す）に任意参加の意思を示した 7 名の学生（以下「Project メンバー」と略す）とした（図Ⅲ-1）。Project メンバーの募集については、2024 年 6 月 10 日（月）に札幌国際大学 2 号館 2 階 211 教室（創風）にて、スポーツ人間学部の 1～4 年生を対象に北広島 Project 2024 の主旨説明を行なった（図Ⅲ-2，図Ⅲ-3）。その後、Microsoft 365Forms を活用して作成した募集要項 QR コードの提示および資料配布にて周知した。なお、募集期間は 2024 年 5 月 13 日（月）～5 月 31 日（金）とした。

所属	人数
スポーツビジネス学科 1 年	1
スポーツビジネス学科 2 年	3
スポーツビジネス学科 3 年	1
スポーツビジネス学科 4 年	0
スポーツ指導学科 1 年	0
スポーツ指導学科 2 年	0
スポーツ指導学科 3 年	1
スポーツ指導学科 4 年	1
スポーツ人間学部（合計）	7

北広島Projectメンバーの所属学科

- スポーツビジネス学科 1 年
- スポーツビジネス学科 2 年
- スポーツビジネス学科 3 年
- スポーツビジネス学科 4 年
- スポーツ指導学科 1 年
- スポーツ指導学科 2 年
- スポーツ指導学科 3 年
- スポーツ指導学科 4 年



図Ⅲ-1 調査対象者の詳細



図Ⅲ-2 主旨説明スライド①

【連携事項】

1. 地域活性化に関すること。
2. 地域支援に関すること。
3. 地域人材の育成に関すること。
4. 産業・学術・文化の振興に関すること。
5. その他、目的を達成するために必要と認められる事項。

北広島Project

●学ぶ

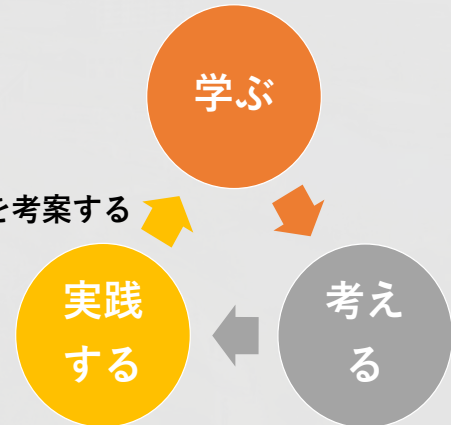
地域に溶け込み、市についての理解を深める

●考える

課題解決など、市をより良くするためにできることを考案する

●実践する

市を実践のフィールドとして活用し、活動をする



図Ⅲ-3 主旨説明スライド②

Ⅲ-2. 北広島 Project が目指すアクティブラーニングの視点に立った取り組み

「アクティブ・ラーニング」と「アクティブラーニング」は、中黒（・）の有無に応じて中央教育審議会＆文部科学省主導の言語（前者）なのか教育改革のキーワードとして用いる言語（後者）なのかによって使い分けが必要となる。

まず、中央教育審議会（2012）が示す「アクティブ・ラーニング」であるが、教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称とされる。そのため、アクティブ・ラーニングは、学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図ることと定義されている。ここでいう能動的な学習は、発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等によって実現を目指すものである。

つまり、中央教育審議会（2012）が示す「アクティブ・ラーニング」は、①教育課程内での学修であり、②求められる技能・態度（能力）を育てるための手段としての位置づけにあることが窺える。

次に教育改革のキーワードとして用いられる「アクティブラーニング」は、一方向的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のことと定義される（溝上，2014）。能動的な学習には、書く・話す・発表する等の活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。なお、認知プロセスとは、知覚・記憶・言語・思考といった心的表象としての情報処理プロセスのことを指しており。「思考」には、論理的／批判的／創造的思考、推論、判断、意思決定、問題解決などがある。

したがって、教育改革のキーワードとして用いられる「アクティブラーニング」（溝上，2014）は、「学校教育から一般社会への円滑な移行を実現するための方策」としての位置づ

けにあることが窺える。

ここまで「アクティブ・ラーニング」(中央教育審議会, 2012)と「アクティブラーニング」(溝上, 2014)の位置づけについて述べてきた。両者の共通点と相違点それぞれあげるならば、前者(共通点)は、いずれにおいてもパッシブラーニング(講義等を聞くだけといった受動的学習)からの脱却を意図していることが窺える。後者(相違点)に関しては、「アクティブ・ラーニング」(中央教育審議会, 2012)が、「認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力」が育つような成果(アウトカム)ベースの活動(技能や態度の育成)に留まる。その一方、「アクティブラーニング」(溝上, 2014)は、活動への関与と認知プロセスの外化を示すことから「アクティブ・ラーニング」(中央教育審議会, 2012)が有する「技能や態度の育成」に加えて「認知プロセスの外化」すなわちアウトプットを目指していることがわかる。

この北広島プロジェクトは、北広島市と札幌国際大学の包括連携協定の下、北広島市の地域振興に意欲を有する学生が主体となって課題発見およびその解決に取り組むことを趣旨としている。つまり、このプロジェクトは、学生にとって大学から学びのフィールドを地域に広げて活動していく中で、北広島市が有する魅力や資源、課題について調べ上げ、学生にとっての主体的あるいは対話的な学びを通した「技能や態度の育成」と、「認知プロセスの外化」を目指した実学的な学びの機会の提供することを狙いとしている。それは、単に授業に出席することや単位を修得することに関わる教育活動とは一線を画すものであり、これから先の教育の在り方を先進的に体現し得る取り組みであるともいえるだろう。

以上のことから、北広島プロジェクトが目指す学生の主体的な学びは、教育改革のキーワードとして用いられる「アクティブラーニング」(溝上, 2014)の様相が反映されているといえる。

Ⅲ-3. 調査方法の検討

本項および次項では、参加学生の学修成果の検証に取り組むべく、成果の検証方法について検討する。

アクティブ・ラーニングにおける「技能や態度の育成」は、学修者が能動的に学修することによる、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図ることと定義されている(中央教育審議会, 2012)。これらの要素をそれぞれまとめていくと、①認知的能力(課題解決のプロセスにおける各課題について適宜解決しながら目標達成)、②倫理的能力(良いことと悪いことの区別)、③社会的能力(他者との協力)、④教養(・知識・課題の発見に必要な基礎知識{例. 北広島市の概要と現状}、・課題を見出す想起、・問題点と課題の解釈、・問題解決)、⑤知識、⑥経験(実学的な学び、実践)に区分けされる。これらは、質問紙調査法を適用することで、2023年度北広島 Project ならびに北広島 Project 2024における実践の成果を比較検討していくことが可能となる。

一方、「認知プロセスの外化」に関しては、前提とされる「技能や態度の育成」に基づくアウトプットの状況について検討していく必要がある。Project メンバーが、北広島 Project 2024での活動を通して「いつ」「何が」「どのように」起こり、「何を」感じとって学びへ昇華させていったのかを検討していくことが求められる。この点を踏まえ、本報告書の成果検証においては、インタビュー調査を用いることによって、Project メンバーがプロジェ

クトに参加していく中で生じ得た思考や見方・考え方の変容について検討することが可能となる。

以上を踏まえ、アクティブラーニングにおける「技能や態度の育成」と「認知プロセスの外化」については、質問紙調査とインタビュー調査に大別して検討を試みる。

①. 質問紙調査法の内容と実施時期

質問紙調査に向けて、質問紙調査票に盛り込むべきアクティブラーニングにおける「技能や態度の育成」の構成要素は、①認知的能力、②倫理的能力、③社会的能力、④教養、⑤知識、⑥経験に区分けされる（中央教育審議会，2012）。

上記の要素を踏まえると、アクティブラーニングにおける「技能や態度の育成」を検討する質問紙調査票の構成要素下記の通り整理される（表Ⅲ-1）。

表Ⅲ-1 アクティブラーニングにおける「技能や態度の育成」を検討する質問紙調査票の構成要素

※質問紙調査票の構成要素	
1. 認知的能力	
2. 倫理的能力	
3. 社会的能力	
4. 教養	
・ 知識・課題の発見に必要な基礎知識	・ 課題を見出す想起
・ 問題点と課題の解釈	・ 問題解決
5. 知識	
6. 経験	

北広島 Project は、2023 年度（昨年度）に発足して試験的な調査を実施した（横山ほか，2024）。

2024 年度で 2 年目にあたる北広島 Project 2024 における成果検証の手法については、横山ほか（2024）が実践したフェイスシート（4 問）、北広島 Project の振り返り（2 問）、主体的な学びに取り組んだ内容の観点別評価（6 問）の計 12 問からなる「主体的な学びおよび活動に対する自信度調査」を適用することとした。

また、「主体的な学びおよび活動に対する自信度調査」において設定した主体的な学びに取り組んだ内容の観点別評価 6 問では、①認知的能力、②倫理的能力、③社会的能力、④教養、⑤知識、⑥経験に関する自信度の変容に着目する。これらの自信度については、「主体的な学びに取り組む上で『〇〇』に対するあなたの自信の度合いを選択してください」という質問文を設定した。回答の選択肢は、①大変自信がある（問題提起・課題解決のノウハウを、他者へ教えることができる）、②自信がある（問題提起・課題解決のノウハウを、自身の活動に活かすことができる）、③自信がない（問題提起・課題解決について、何度か触れる機会があった）、④全く自信がない（問題提起・課題解決について、今まで全く触れたことがなかった）の 4 件法とした。

この「主体的な学びおよび活動に対する自信度調査」は、北広島 Project 2024 の事後調査として、2025 年（令和 7）年 3 月 18 日に実施した（北広島市への成果報告日）。「主

体的な学びおよび活動に対する自信度調査」の具体的な設問と内容は、次に示した通りである（表Ⅲ-2）。

表Ⅲ-2 主体的な学びおよび活動に対する自信度調査（1/2）

2024（令和 6）年度 「主体的な学びおよび活動に対する自信度調査」 ※基本情報調査の項目（フェイスシート） Q1. あなたの学生番号を選択してください。 Q2. あなたの氏名を選択してください。 Q3. あなたの所属学科を選択してください。 Q4. あなたの学年を選択してください。 ・ 1 年 ・ 2 年 ・ 3 年 ・ 4 年 ※北広島プロジェクトに対する意気込み（振り返り） Q5. 2024 年度「北広島 Project」の活動に対して あなたが期待していたことについて教えてください。 Q6. 2024 年度「北広島 Project」の活動を通して あなたが挑戦したことについて教えてください。 ※本調査の項目 あなたが自己や仲間との地域貢献事業を通した主体的な学びに取り組むについて 下記の質問項目に対する現在の自信の度合いに最も近いものを選択してください。 Q7. 認知的能力 主体的な学びに取り組む上で「提示された課題を適宜解決しながら目標達成すること」 に対するあなたの自信の度合いを選択してください。 ①大変自信がある（問題提起・課題解決のノウハウを、他者へ教えることができる） ②自信がある（問題提起・課題解決のノウハウを、自身の活動に活かすことができる） ③自信がない（問題提起・課題解決について、何度か触れる機会があった） ④全く自信がない（問題提起・課題解決について、今まで全く触れたことがなかった） Q8. 倫理的能力 主体的な学びに取り組む上で「良いことと悪いことを適切に区別すること」 に対するあなたの自信の度合いを選択してください。 ①大変自信がある（倫理観を、他者へ教えることができる） ②自信がある（倫理観を、自身の活動に活かすことができる） ③自信がない（倫理観について、何度か触れる機会があった） ④全く自信がない（倫理観について、今まで全く触れたことがなかった）

表Ⅲ-2 主体的な学びおよび活動に対する自信度調査（2/2）

Q9. 社会的能力

主体的な学びに取り組む上で「学習集団の中での協調性や学習集団の中での積極性」に対するあなたの自信の度合いを選択してください。

- ①大変自信がある（集団での学習活動に関するノウハウを，他者へ教えることができる）
- ②自信がある（集団での学習活動に関するノウハウを，自身の活動に活かすことができる）
- ③自信がない（集団での学習活動について，何度か触れる機会があった）
- ④全く自信がない（集団での学習活動について，今まで全く触れたことがなかった）

Q10. 教養

主体的な学びに取り組む上で「小学校・中学校・高等学校での勉強や大学における学び」

に対するあなたの自信の度合いを選択してください。

- ①大変自信がある（これまでの勉強や学びは，大変積極的に取り組んでいた）
- ②自信がある（これまでの勉強や学びは，積極的に取り組んでいた）
- ③自信がない（これまでの勉強や学びは，消極的な取り組みであった）
- ④全く自信がない（これまでの勉強や学びは，大変消極的に取り組みであった）

Q11. 知識

主体的な学びに取り組む上で「自身の知見を学びに活かすこと」

に対するあなたの自信の度合いを選択してください。

- ①大変自信がある（自身の知見を他者と共有して課題解決に活かすことができる）
- ②自信がある（自身の知見を自らの課題解決に活かすことができる）
- ③自信がない（自身の知見について，何度か考える機会があった）
- ④全く自信がない（自身の知見について，これまでに考えたことがなかった）

Q12. 経験

主体的な学びに取り組む上で「自身の経験をアウトプットすること

（プレゼンテーション，成果発表及び成果報告，プロダクション，相互援助等）」

に対するあなたの自信の度合いを選択してください。

- ①大変自信がある（アウトプットのノウハウについて，他者へ教えることができる）
- ②自信がある（アウトプットのノウハウについて，自身の活動に活かすことができる）
- ③自信がない（アウトプットのノウハウについて，何度か触れる機会があった）
- ④全く自信がない（アウトプットのノウハウについて，今まで全く触れたことがなかった）

以上のことから、アクティブラーニングにおける「技能や態度の育成」状況は、中央教育審議会（2012）が示す能動的学修を構成する要素（認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験）の変容について検討することとした。そして、データ収集の方策として、質問紙調査法を採用することとした。

②. 質問紙調査における成果の検証方法に関する検討

本報告書は、北広島 Project 2024 の成果検証に取り組むことを主題としている。だが、本研究の対象者の中には、前年度の北広島 Project 2023 から継続して活動に取り組む Project メンバーの学生が存在する。このような条件に鑑みると、横山ほか（2024）が示した北広島 Project 2023 で得られた成果・課題と今年度の取り組みである北広島 Project 2024 の 2 年間に渡って実施された取り組みに基づく成果・課題を比較検討していくことで、北広島 Project の経年的な成果検証についても取り組むことができる。

以上のような条件を踏まえ、北広島 Project 2024 における質問紙調査「主体的な学びおよび活動に対する自信度調査」の成果検証に関する方法は、第 1 段階として、北広島 Project の振り返り（2 問：Q5・Q6）、主体的な学びに取り組んだ内容の観点別評価（6 問：Q7・Q8・Q9・Q10・Q11・Q12）の回答状況に基づく結果を示していく。さらに、第 2 段階として、横山ほか（2024）が提示した「主体的な学びおよび活動に対する自信度調査」と北広島 Project 2024 で収集された同調査の結果を比較検討して、2023 年度北広島 Project ならびに北広島 Project 2024 を経年的に取り組んだ学生の学びについて検討を深めていくこととする。

③. インタビュー調査法の検討

アクティブラーニングにおける「認知プロセスの外化」を検証するために、北広島 Project 2024 においては、対象学生や関係者へインタビューを実施して、地域貢献事業を通したアクティブラーニングの構造や本質を探索的に検討する。

インタビュー調査の対象は、Project メンバーの中から顕著な数値の変容を示した者 1 名を抽出し、半構造化インタビューおよび逐語録の作成に取り組むこととした。また、北広島 Project にて、包括連携協定を締結している北広島市役所の職員 2 名もインタビュー内容の対象とした。

IV. 活動報告

IV-1. 北広島市役所訪問

2024 年 6 月 13 日（木）に、北広島市役所訪問をした。Project メンバーは同市役所職員の方々と顔合わせを行い、挨拶を交わした。その後、2024 年度に北広島市で開催されるイベントの内容とイベント開催のスケジュールについて確認をした。また、Project メンバーが、どのようなイベントを企画・運営していきたいのか意見交換が行われた。

IV-2. F.VILLAGE スポーツフェスティバル ブース出展

2024 年 9 月 23 日（月）に、「F. VILLAGE スポーツフェスティバル」が開催された。北広島 Project 2024 ではブース出展を企画し、新体力テストおよびロコモティブシンドロ

ームの調査（立ち上がりテスト,歩行テスト）を実施した。ブース出展に向けて、企画検討会議やリハーサルを行った。イベント当日は、8時から現地にて準備を開始した。物品の搬入や設置後、各ブースの担当者の最終打ち合わせが行われ、9時30分からイベントがスタートした。開始時から徐々に来場者が増えていき、記入用紙がなくなるほど、来場者の数を記録した（図IV-1）。

ブース出展後には、反省会を開催し、企画内容や準備、当日の運営などについて、Projectメンバーが意見を出し合い情報共有を行なった（図IV-2）。



図IV-1 F. VILLAGE スポーツフェスティバル：運営の様子



図IV-2 F. VILLAGE スポーツフェスティバル：反省会の様子

IV-3. 北広島団地地域サポートセンター“ともに”主催「地域の運動会」の企画運営

2025年2月15日（土）に、北広島団地地域サポートセンター“ともに”で「地域の運動会 2025」が開催された。同イベントは、北広島市および同施設から依頼があり、前年度に引き続いての参加となった。

北広島 Project 2024 では、運動会の午後の部を担当した。企画検討会議では、前年度の経験を活かした様々なアイデアが生まれ、8つの企画案が製作された。それらの企画は、

2025年1月17日（金）の“ともに”会議にて、プレゼンテーションを行い、北広島団地地域交流ホームふれての小野崎ひとみ氏、“ともに”施設長の向山篤氏、地域の運動会の代表である藤野伸之氏をはじめとした市民スタッフから意見を収集した（図IV-3）。

収集した意見を参考に、考案した企画をブラッシュアップし、内容検討および準備を進めた。そして、2025年2月14日（金）には、北広島団地地域サポートセンター“ともに”にて前日リハーサルを行った。当日の流れに沿って、実施位置の確認や動線の確保、企画の時間配分など、学生がデモンストレーションをしながら確認を行なった（図IV-4）。

当日は、地域の子どもから高齢者の幅広い年齢層の来場があり、総勢130名の来場者数を記録した。



図IV-3 “ともに”地域の運動会：会議の様子



図IV-4 “ともに”地域の運動会：運営の様子

IV-4. ロコモティブシンドロームの調査分析

北広島 Project 2024 の活動では、イベント運営に加え、調査分析の活動に着手した。調査内容は、ロコモティブシンドローム（以下「ロコモ」と略す）である。

ロコモは、「運動器の障害のために立ったり歩いたりするための身体能力（移動機能）が低下した状態」（日本整形外科学会・日本運動器科学会，2021，p. 20）と定義されている。一般的なロコモの調査法として、ロコモ度テストが採用されている。ロコモ度テストとは、「ロコモ度テスト1：立ち上がりテスト（下肢筋力をしらべる）」「ロコモ度テスト2：2ステップテスト（歩幅を調べる）」「ロコモ度テスト3：ロコモ25（体の状態・生活状況をしらべる）」の3段階のテストで構成されている。前述した3段階のうち、1つでも基準に該当する場合はロコモと判定される（ロコモ ONLINE，online）。

2025 年 2 月 15 日（土）、北広島団地地域サポートセンター“ともに”で「地域の運動会 2025」にて、運動会企画の 1 つとして、ロコモ度テストを実施した。同運動会の来場者から任意参加にて調査を実施し、男性 20 名、女性 28 名の合計 48 名のデータを収集した。収集したデータから、①年代別のロコモ度の結果と考察、②性別ごとのロコモ度の結果と考察の 2 つの項目で分析を行なった。

なお、調査分析の結果は、北広島 Project 2024 の Project メンバーが作成した報告書にて記載しているため、本報告書では割愛する。

V. 研究結果

V-1. 質問紙調査の結果

本調査の結果については、対象者となった学生をアルファベット順に示すこととした。本報告書では、前述の内容を踏まえ、対象者 7 名をそれぞれ学生 A・C・D・G・H・I・J と表記する。なお、学生 A・C・D・G・H の 5 名は、前年度に展開された北広島 Project 2023 からの継続メンバーであり、学生 I・J の 2 名は今年度実施となった北広島 Project 2024 から参入となった新規メンバーである。

他方、学生 B・E・F の 3 名に関しては、北広島 Project 2023 を以ってプロジェクト活動を終了していることから、本報告書における比較検討の対象からは除外することとした。

表 V-1 は、北広島 Project 2024 事後に収集した「主体的な学びおよび活動に対する自信度調査」で 設定された設問「2024 年度『北広島 Project』の活動に対して期待していたこと」に対する学生 A・C・D・G・H・I・J（7 名）による自由記述式回答の結果を示している。

表 V-1 北広島 Project 2024 の活動に対して期待していたこと

対象者	Q5. 2024年度「北広島Project」の活動に対して、あなたが期待していたことについて教えてください。
学生A	授業では得られない、さまざまな学びを得ることができる。
学生C	社会で活躍されている方との関わり
学生D	北広島市の魅力を知り、地域の活性化に貢献できるのではないかと期待していた
学生G	昨年と同様ともにのスタッフの方々に会えることを楽しみにしていました。
学生H	自分が苦手な前にでて話すとか、協調性のなさだとかを経験により克服し、今後の就職に繋げて行きたいと期待していました。
学生I	自分たちでなにかを企画し、実行すること。
学生J	北広島市でのイベントに多く携われる

表 V-2 は、横山ほか（2024）が北広島 Project 2023 事後に収集した「主体的な学びおよび活動に対する自信度調査」で設定された設問「2023 年度『北広島 Project』の活動に対して期待していたこと」より、北広島 Project 2024 も継続してプロジェクトの活動に取り組んだ学生 A・C・D・G・H（5 名）の自由記述式回答の結果を抽出して示している。

表 V-2 前年度（北広島 Project 2023）の活動に対して期待していたこと

対象者	Q5. 2023年度「北広島Project」の活動に対して、あなたが期待していたことについて教えてください。
学生A	北広島市について知る。北広島市を多くの人に知ってもらう。
学生C	北広島市の方との関わりを持てたりすることや北広島市について知ることが出来ること
学生D	自分自身で何かにチャレンジし、成功体験を得られること
学生G	エスコンフィールドHOKKAIDOに行けると思っていました。
学生H	北広島市役所の方と北広島の今後についての意見交換をたくさん行うこと

（「令和 5 年度札幌国際大学奨励研究費助成報告書：北広島市と札幌国際大学の連携を通じた学生主導による学びの展開及び地域振興の探索」（横山ほか，2024，p. 18）を基に筆者作成）

次に、表 V-3 は、北広島 Project 2024 事後に収集した「主体的な学びおよび活動に対する自信度調 3」で 設定された設問「2024 年度『北広島 Project』の活動を通して、あなたが挑戦したこと」に対する学生 A・C・D・G・H・I・J（7 名）による自由記述式回答の結果を示している。

表 V-3 北広島 Project 2024 の活動に対して期待していたこと

対象者	Q6. 2024年度「北広島Project」の活動を通して、あなたが挑戦したことについて教えてください。
学生A	挑戦したことは、イベントを通して、さまざまな年代の人と交流に挑戦した。
学生C	積極的にコミュニケーションを取って、まとめること
学生D	小さい子から高齢者まで多くの人と交流することのできるレクリエーションを企画できたこと。
学生G	今年は市役所の方々とのメールのやり取りをし、中心となって企画を進めました。
学生H	マイクを持って話したり、ミーティングでも多くの意見をだして話したりすることがありました。昨年度よりも多くの言葉が出るようになり、積極的に話すことを意識していました。
学生I	北広島市の方々を笑顔にという目標を個人的に立てていました。1年を終えてみて、実際にイベントでたくさんの笑顔が見られ、とても嬉しいし頑張ってよかったなと実感しました。また、北広島市役所の方々やともにの方々にも来年もまたやってほしいとか来て欲しいと言っていただき、これ以上嬉しい言葉は無いと思い、とてもやりがいがあったなと感じました。
学生J	沢山のイベントを企画し、ともにではハーフパイプリレーで、自分がマイクを持ち、指示を出したりした。

表 V-4 は、横山ほか（2024）が北広島 Project 2023 事後に収集した「主体的な学びおよび活動に対する自信度調査」で設定された設問「2023 年度『北広島 Project』の活動を通して、あなたが挑戦したこと」より、北広島 Project 2024 も継続してプロジェクトの活動に取り組んだ学生 A・C・D・G・H（5 名）の自由記述式回答の結果を抽出して示している。

表 V-4 前年度（北広島 Project 2023）の活動に対して期待していたこと

対象者	Q6. 2023年度「北広島Project」の活動を通して、あなたが挑戦したことについて教えてください。
学生A	市役所の偉い人たちにプレゼンした。会話がうまく進むように発言した
学生C	自分から周りに情報を発信したり、状況を把握しながら動いたこと
学生D	市役所で自らプレゼンを実施したこと。
学生G	会議での発言、資料の作成など行いました。
学生H	資料作成、イベント企画を考えること全てが初めての体験だったので全て挑戦でした

（「令和 5 年度札幌国際大学奨励研究費助成報告書：北広島市と札幌国際大学の連携を通じた学生主導による学びの展開及び地域振興の探索」（横山ほか，2024，p. 18）を基に筆者作成）

表 V-5 は、北広島 Project 2024 事後における「学生の主体的な学びおよび活動に対する自信度調査」で設定された設問「あなたが自己や仲間との地域貢献事業を通じた主体的な学びに取り組みについて 下記の質問項目に対する現在の自信の度合いに最も近いものを選択してください」に対する Project メンバーの回答結果を示している。

それぞれの設問に対する得点平均は、Q7. 認知的能力： 3.57 ± 0.53 、Q8. 倫理的能力： 3.71 ± 0.49 、Q9. 社会的能力： 3.29 ± 0.76 、Q10. 教養： 3.29 ± 0.76 、Q11. 知識： 3.71 ± 0.49 、Q12. 経験： 3.14 ± 0.90 を示した。さらに、Q7 から Q12 までの合計得点は、 20.71 ± 1.60 を示した。

表 V-5 北広島 Project 2024 事後における学生の主体的な学びおよび活動に対する自信度調査

2024年度「北広島Project」事後における学生の主体的な学びおよび活動に対する自信度調査							
対象者	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	合計
	認知的能力	倫理的能力	社会的能力	教養	知識	経験	得点
A	4	4	3	3	4	3	21
C	4	4	4	4	4	4	24
D	3	4	3	3	4	3	20
G	3	3	4	3	3	4	20
H	4	3	3	4	4	2	20
I	4	4	2	2	3	4	19
J	3	4	4	4	4	2	21
M	3.57	3.71	3.29	3.29	3.71	3.14	20.71
SD	0.53	0.49	0.76	0.76	0.49	0.90	1.60

4：大変自信がある，3：自信がある，2：自信がない，1：全く自信がない

表 V-6 および図 V-1 は、北広島 Project 2023（横山ほか，2024）および北広島 Project 2024 双方に取り組んだ学生 A・C・D・H・I の 5 名による「主体的な学びおよび活動に対する自信度調査」の結果をそれぞれ示している。

Q7. 認知的能力は、北広島 Project 2023 実施後で 3.00 ± 0.00 であったことに対し、北広島 Project 2024 実施後には 3.60 ± 0.55 と、0.13 点の数値の向上が確認された。

Q8. 倫理的能力は、北広島 Project 2023 実施後で 3.80 ± 0.45 であったことに対し、北広島 Project 2024 実施後には 3.60 ± 0.55 と、0.20 点の数値の低下が確認された。

Q9. 社会的能力は、北広島 Project 2023 実施後で 3.20 ± 0.84 であったことに対し、北広島 Project 2024 実施後には 3.40 ± 0.55 と、0.20 点の数値の向上が確認された。

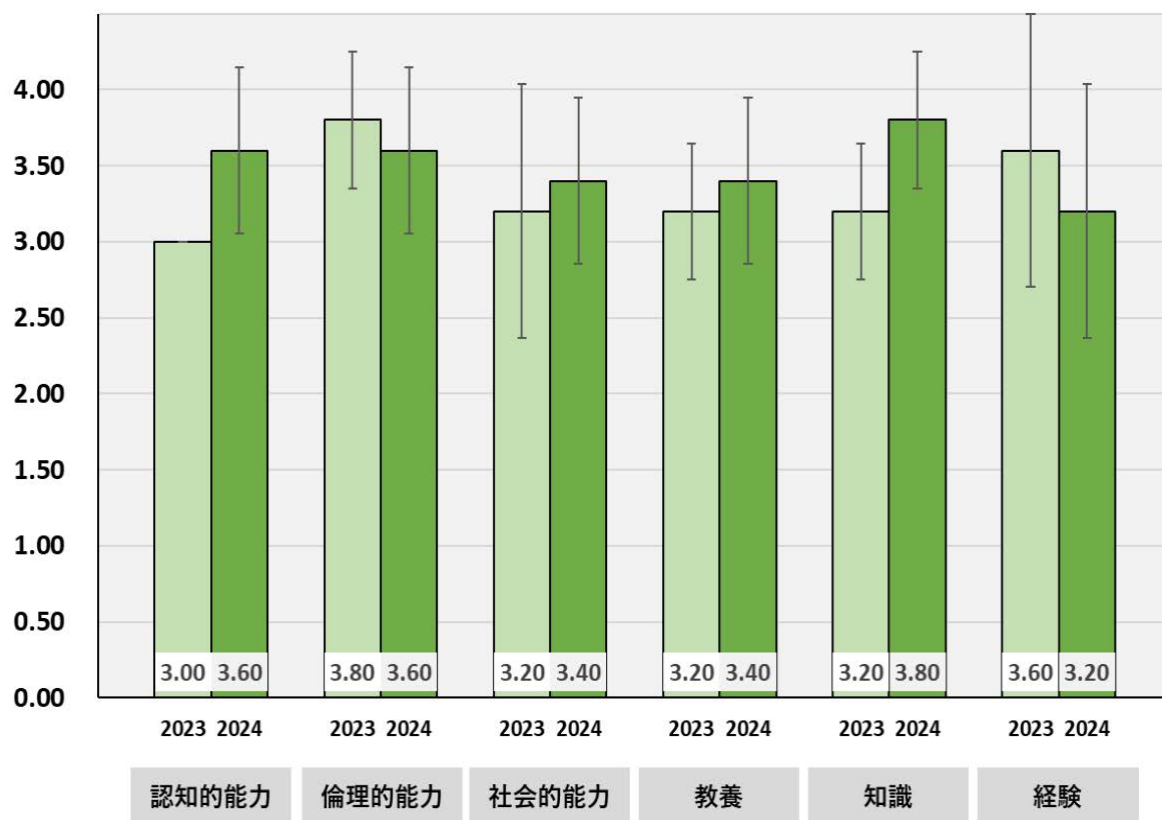
Q10. 教養は、北広島 Project 2023 実施後で 3.20 ± 0.45 であったことに対し、北広島 Project 2024 実施後には 3.40 ± 0.55 と、0.20 点の数値の向上が確認された。

Q11. 知識は、北広島 Project 2023 実施後で 3.20 ± 0.45 であったことに対し、北広島 Project 2024 実施後には 3.80 ± 0.45 と、0.60 点の数値の向上が確認された。

Q12. 経験は、北広島 Project 2023 実施後で 3.60 ± 0.89 であったことに対し、北広島 Project 2024 実施後には 3.20 ± 0.84 と、0.40 点の数値の低下が確認された。

表 V-6 北広島 Project 2023・北広島 Project 2024 の継続メンバーを対象とした主体的な学びおよび活動に対する自信度調査の比較

主体的な学びおよび活動に対する自信度調査 (2023年度および2024年度における継続メンバーの比較)		N=5			差
		M		SD	
Q7. 認知的能力 (提示された課題を適宜解決しながら目標達成すること)	2023年度	3.00	±	0.00	0.60
	2024年度	3.60	±	0.55	
Q8. 倫理的能力 (良いことと悪いことを適切に区別すること)	2023年度	3.80	±	0.45	-0.20
	2024年度	3.60	±	0.55	
Q9. 社会的能力 (学習集団の中での協調性や学習集団の中での積極性)	2023年度	3.20	±	0.84	0.20
	2024年度	3.40	±	0.55	
Q10. 教養 (小学校・中学校・高等学校での勉強や大学における学び)	2023年度	3.20	±	0.45	0.20
	2024年度	3.40	±	0.55	
Q11. 知識 (自身の知見を学びに活かすこと)	2023年度	3.20	±	0.45	0.60
	2024年度	3.80	±	0.45	
Q12. 経験 (認知プロセスの外化) (自身の経験をアウトプットすること)	2023年度	3.60	±	0.89	-0.40
	2024年度	3.20	±	0.84	



図V-1 北広島 Project 2023 と北広島 Project 2024 の継続メンバーを対象とした主体的な学びおよび活動に対する自信度調査の比較

V-2. インタビュー調査の結果

前項で扱った質問紙調査の結果を踏まえ、プロジェクトメンバーの中から顕著な数値の変容を示した者 1 名を抽出し、半構造化インタビューおよび逐語録の作成に取り組んだ。また、北広島 Project にて、包括連携協定を締結している北広島市役所の職員 2 名もインタビュー内容の対象とした。

下記、学生 G を対象としたインタビュー①の逐語録である。

【インタビュー①・学生 G (2 年目)】

質問者「応募のきっかけは。」

学生 G「当初（1 年目）は北広島＝エスコンフィールドに行けたりするのかな…という思いが強く参加に至った。参加してしばらくたったころに『ちょっと違ったかな』という思いが湧いてきたり、アルバイトも始まってしまったので不安な部分があったことは確か。しかし、少ないメンバーの中でも先輩たちが優しかったし、なんとか頑張れたという感じだった。」

質問者「中でも 1 年目の成果は何があったか。」

学生 G「企画した運動会を実際にやってみれたし、その後に行われたメンバー全員で報告書作成は泊りがけだったことが楽しかった。また、年間通して職員とのメールなどのやり取りもいい経験になった。これまで大人との関わりがほとんどなかった中で、緊張はしたが文章の書き方や表現、また日程調整などのやり取りは 1 年目のノウハウが非常に大きく、2 年目は落ち着いてできた。」

質問者「“2 年目の挑戦”に対して感じたことは何だったのか。」

学生 G「2 年目のチーム活動参加に関しては友人も降りたし正直、迷った。ただ決めるのに時間もなかったし、1 年目で一緒にやった先輩がいたことが大きかった。総人数は減ったが『より良いものを生み出そう』という気持ちが断然 1 年目より強かったし、2 年目と向けての流れが（頭の中に）あった。すぐに何をやらなければいけないかを掴めたとし、昨年の経験から自分の意見をしっかりと言い出せたことは大きな変化だったと感じる。」

質問者「1 年目と 2 年目の違いは。」

学生 G「僅か 1 年ではあったが、(プロジェクト活動として)動くことに関して必要なさまざまな要素はわかっていたし、状況も予測できるようになったが、気持ちのどこかで『これぐらい（やれば）で大丈夫じゃない?』とかの緩みはあったような気がしている。確かめること、リハーサルを大切にすることの重要性は 2 年目のイベントが終了して強く感じた。」

下記、職員 K・S を対象としたインタビュー②の逐語録である。

【インタビュー②・職員 K・S】

質問者「この 2 年間、プロジェクトチームとともに北広島市の近未来について、歩みの中で感じたこと。まずは最初のあいさつを交わしながら学生たちと関わりについて。」

職員 K「当初は大学さんから市と何かの連携を結べないかというご提案から始まったもの。これまで 2 つの大学さんと組んできたが、年に数回大学教員が市民に対しての講座開催などにとどまってきた。やるのであればぜひ学生さんが考える、学生さんが主体となって動いていくものをやってみたいと思っていた。」

質問者「方向性は定まったが、次に大切なものは。」

職員 S「初年度は誰に向けたものなのかー、という部分をはっきりとせず、見つけ出すまでに時間を要したと思うが、2 年目はしっかりと現場（イベント全般）を経験し、見て直接感じていたし、準備から予想も建てられていたと感じた。」

職員 K「開催したイベント（運動会）が同様のものであり、プレゼンテーションの資料などは大きな変化はなかったが、イベントに向かう顔つきの変化は見違えた。さらにイベント会議や準備段階の所作、佇まいというのか特に 2 年目のメンバーは自信を持ってやっていた。」

質問者「9 月のエスコンイベントについては。」

職員 K「9 月のエスコンでのスポーツフェスティバルで実施したロコモテストについて『大学の取り組みをしっかりと組み込み、学びを出せていたし良かった。』参加者も改めて数値化したもの、説明を聞いて『なるほど』という雰囲気が漂っていた。」

質問者「改めて 2 年間の活動を終えた北広島プロジェクトに関して。」

職員 S「必死感。決して悪いことではないのですが 1 年目はそれが全面に出すぎていたが、2 年目は本当によいバランスを感じさせてくれたチームになった。」

質問者「本プロジェクトの展望は。」

職員 K「(プロジェクトメンバーの) 学生一人ひとりが役割をしっかりとやっていただければ、市内にある 3 つの高校、および高校生との関わりや夏場イベントでのブース出展、あるいはエスコンを舞台に躍動する北海道日本ハムファイターズとの連携にも発展していけると思う。冬の運動会はもう参加者が学生さんと時間を共有することを楽しみにしている。そこをうまく継続していくことだと感じる。」

職員 S「やらされ感からいつしか学生が中心になって主体的な動きが当たり前に見えてきた。継続していくことが大事。」

VI. 考察

VI-1. 質問紙調査の考察

①. 自由記述形式の回答（Q5. 期待していたこと & Q6. 挑戦したこと）を踏まえた考察

質問調査の「Q5. 2024 年度『北広島 Project』の活動に対して期待していたこと」からは、「社会人との関わり」、「イベントの企画・運営」、「地域活性化に対する貢献」、「授業では得られない学び」といったキーワードが抽出された。それを踏まえた上で、「Q6. 2024 年度『北広島 Project』の活動を通して、あなたが挑戦したことについて教えてください」に対する対象者の回答状況からは、「人々とのコミュニケーション・交流」「イベントの企画・運営」に該当するキーワードが抽出された。

学習者の主体的な学習を促す学習の 1 つに課題解決型学習（Project Based Learning : PBL）と呼ばれる手法が存在する（デューイ, 1957, 1975a, 1975b）。課題解決型学習（Project Based Learning : PBL）では、学習者にテーマの実践例を紹介し、そのテーマとの照らし合わせを行いながら自身あるいはチームの活動を思考・実践することによって学習の深化を図っていく。端的に言えば、提示されたテーマに対して仮説と検証を繰り返すプロセスを重視した学習である。

北広島 Project 2024 は、北広島市における地域振興や地域活性を題材として、対象者（学生）の自由な発想に基づく実学的な学びを促す取り組みを展開していった。対象者が北広島 Project に期待していた社会人との関わりを通じた地域活性化のための企画・運営というものは、通常の授業では学び得ることの難しい実社会との直接的な繋がりを意識したプロセスの中での学びが反映されたものとして捉えることができる。実際に対象者は、Project メンバー内でのコミュニケーションに留まることなく、地域社会の人々との交流に努めることを意識しながら、北広島市の地域振興や地域活性に繋げていくための企画の立案とその運営に取り組んでいったことが示されている。

なお、昨年度の実践である北広島 Project 2023 の同 Project メンバーによる回答を参照すると、同 Project に期待していた内容としては、「北広島市について知ること」や「北広島市民との関わりを持つこと」、「北広島市の施設を訪問すること」に集約される（横山ほか, 2024）。また、同 Project で挑戦した内容としては、「会議資料の作成」「イベントの企画」「プレゼン発表」に集約されることが窺える。このような状況から、初年度（北広島 Project 2023）では、傾向的に Project メンバー個人あるいは Project チームの活動に帰結するような内向的記述が中心的内容として見受けられる。その一方で、今年度（北広島 Project 2024）では、前述の記述から外交的記述となっていることが読み取れた。このことから、Project メンバーは、初年度段階においては Project そのものの取り組み方や学び方を探索するような傾向にあったことが推察される。その上で、次年度にあたる北広島 Project 2024 では、初年度の段階で蓄積させていった経験やノウハウをベースとしながら、より地域貢献に繋げていくような様相へと取り組みや学びの形への変容が見受けられた。

②. 自信度調査（Q7～Q12）を踏まえた考察

質問紙調査の結果から、6 項目中 4 項目（認知的能力、社会的能力、教養、経験）の数値の向上が確認された。横山ほか（2024）が示した同様の質問紙調査の結果と同じくして、自信度調査に該当する項目の平均得点が 3.00 を示していたことから、Project メンバーの

主体的な学びおよび活動に対する自信は、ある程度の基盤が整っている中でプロジェクトが遂行されていったことが推察される。

「認知的能力」は、提示された課題を適宜解決しながら目標達成することの自信度を表す項目として位置づけた。Project メンバーの「認知的能力」は、北広島 Project 2023 と北広島 Project 2024 の経年的な比較から数値の向上が確認できた。このことから、Project メンバーは、プロジェクトの遂行を通して、自ら課題を発見し、その解決に向けてより主体的に取り組んでいくことに対する「認知的能力」を身に付けていったことが窺えた。

「社会的能力」は、学習集団の中で協調性や積極性に対する自信度を表す項目として位置づけた。Project メンバーの「社会的能力」は、北広島 Project 2023 と北広島 Project 2024 の経年的な比較から数値の向上が確認できた。このことから、Project メンバーは、プロジェクトの遂行を通して、自分やチームの課題、さらには北広島市の有する課題に関心を寄せつつ、協働する姿勢を示しながら Project の運営に携わり、地域貢献に従事していこうとする「社会的能力」を身に付けていったことが窺えた。

「教養」は、小学校・中学校・高等学校での勉強や大学における学びに対する自信度を表す項目として位置づけた。Project メンバーの「教養」も、北広島 Project 2023 と北広島 Project 2024 の経年的な比較から数値の向上が確認できた。このことから、Project メンバーによるこれまでの学び（昨年度の北広島 Project 2023 を含む）が、北広島 Project 2024 の遂行に対する自身と有能感へと繋げていくものとなっていたことが推察される。

そして、「知識」は、自身の知見を学びに生かすことに対する自信度を表す項目として位置づけた。Project メンバーの「知識」は、北広島 Project 2023 と北広島 Project 2024 の経年的な比較から数値の向上が確認できた。自信度調査の「知識」は、北広島 Project 2023 におけるプロジェクト遂行の前後で数値の低下が見受けられた項目であった（横山ほか、2024）。その一方で、北広島 Project 2024 では、プロジェクト前後における比較検討は実施していないものの、北広島 Project への経年的な実践を通じて自他がこれまでに培ってきた知識を北広島 Project 2024 における学びへと有機的に繋げていくことができていたということが窺えた。

その一方で、数値の低下が見受けられた項目として「倫理的能力」と「経験」が上げられた。

「倫理的能力」では、物事の良し悪しを適切に区別することに対する自信度を表す項目として位置づけた。数値の低下が見受けられた「倫理的能力」について、対象者 5 名の回答状況を確認した所、最も低い値をであっても「3 点：自身がある」であった。このことから、Project メンバーの「倫理的能力」に関する自信度は、実施年度の比較から数値の低下が見受けられるものの、決して低い値を示している訳ではないということが説明できる。そして、「経験」は、自身の経験をアウトプットすることに対する自信度を表す項目として位置づけた。数値の低下が確認された「経験」について、対象者 5 名の回答状況を確認した所、最も低い値を示した学生 H は「2 点：自身がない」を示した。学生 H の自由記述（Q5・Q6）の内容から人前で話すことに対する苦手意識の払拭やチーム内での協調性をテーマとして掲げていた。Project の遂行には勢力的な取り組みを見せていたが、その過程で自己の課題が更に浮き彫りとなっていたことが、数値の低迷に繋がってしまった要因なのではないかと推察される。

Project メンバーは、北広島市という地域の特色や課題について学び、地域特有の利点や課題についてグループ・ディスカッションやディベートを繰り返しながらブラッシュアップに取り組んでいった。とりわけ、イベントに関する企画・運営に際しては、ミーティングを実施するごとに議事録の作成を必須の事項として位置づけ、検討や作業の進捗状況を Project メンバーの誰もが確認していける状況を前年度から継続して作り上げていった。その上で、北広島市との打ち合わせやプレゼンテーション、「エスコンフィールド HOKKAIDO」での F ビレッジスポーツフェスティバルや「ともに」における地域の運動会の企画・運営に携わった経験は、実学的な学びを体現するものであったと考えられる。

また、Project メンバーの主体的な学びおよび活動に対する自信に関しては、昨年度の実践として取り組まれた北広島 Project 2023 においても、ある程度の基盤が整えられた中で活動が遂行されていったことが示されている（横山ほか，2024）。このことから、昨年度の実践（北広島 Project 2023）と今年度の実践（北広島 Project 2024）の経年的な活動を捉えても、北広島市における地域振興や地域の活性化といった実社会で生じている課題に向かってプロセスを重視した主体的な学びの促進が、Project メンバーの期待する学びと挑戦に直結するテーマとして有機的に機能していたことが窺える。

VI-2. インタビュー調査の考察

北広島 Project の 2 年目を終え、Project メンバーおよび北広島市の担当職員から「2 年目を迎えた北広島市と札幌国際大学の包括連携における、行動的および精神的変化」についてのインタビュー（選抜した学生 1 人、市担当職員 2 人）を実施し、双方が 1 年目より 2 年目にもたらされた変化をまとめた。

①. 学生 G のインタビューについて

学生 G は、北広島 Project に 2 年連続で参加した学生である。

学生 G は北広島 Project がスタートした 2023 年 4 月入学を果たし、当初から大学での生活や活動に対して、好意的に興味を抱いていた一人であった。そして、プロジェクト募集に積極的に応募してきた。

応募のきっかけを問うと「当初（1 年目）は北広島＝エスコンフィールドに行けたりするのかな…という思いが強く参加に至った。参加してしばらくたったところに『ちょっと違ったかな』という思いが湧いてきたり、アルバイトも始まってしまったので不安な部分があったことは確か。しかし、少ないメンバーの中でも先輩たちが優しく、なんとか頑張れたという感じだった」と振り返った。

中でも 1 年目の成果は何があったかという質問には「企画した運動会を実際にやってみれたし、その後に行われたメンバー全員で報告書作成は泊りがけだったことが楽しかった」と述べていた。また、「年間通して市側の若い職員とのメールなどのやり取りもいい経験になったと。これまで大人との関わりがほとんどなかった中で、緊張はしたが文章の書き方や表現、また日程調整などのやり取りは 1 年目のノウハウが非常に大きく、2 年目は落ち着いてできた。」と述べていた。このことから、2 年間の北広島 Project の活動を経て感じ

た自らの成長を分析できていることが分かった。

Project メンバーの構成方法は単年ごとに更改され、主役となる学生は担当教員が投げかける募集に反応し、立候補した学生が各年度を責任もって紡いでいくものである。学生 G に関しては、初年度は興味本位で応募したものの、2 年目は自らの意思で応募してきた。

「“2 年目の挑戦”に対して感じたことは何だったのか」について、「(2 年目のチーム活動参加に関しては友人も降りたし) 正直、迷った。ただ決めるのに時間もなかったし、1 年目で一緒にやった先輩がいたことが大きかった」と継続を決断したとのことである。そして「総人数は減ったが『より良いものを生み出そう』という気持ちが断然 1 年目より強かったし、2 年目に向けての流れが(頭の中に)あった。すぐに何をやらなければいけないかを掴めたし、昨年の経験から自分の意見をしっかりと言い出せたことは大きな変化だったと感じる。」と述べている。つまり、経験やキャリアがもたらす日程や時間配分の見通しが立てられるようになっていくことが推察される。

北広島 Project 2024 の活動について、学生 G に投げかけてみた。「僅か 1 年ではあったが、(プロジェクト活動として)動くことに関して必要なさまざまな要素はわかっていたし、状況も予測できるようになったが、気持ちのどこかで『これぐらい(やれば)で大丈夫じゃない?』とかの緩みはあったような気がしている。確かめること、リハーサルを大切にすることの重要性は 2 年目のイベントが終了して強く感じた。」と述べている。このことから、初年度の活動の反省を 2 年目の活動に生かそうとしている姿勢がみられた。

北広島 Project 1 年目は 2 月の市内地域施設での運動会にすべてを注ぎ込んだが、2 年目はエスコンフィールド内で開催された「スポーツフェスティバル」への出展を市側から提案された。学生 G は「新たなイベント発進を決めたことに関しては素直に嬉しかった」と回答しているように、Project メンバーが行ってきた能動的学習と活動が、“信用・信頼の中で認められた”ことにもつながった。加えて体力測定やロコモテストを敢行する中で、Project メンバー内でのコミュニケーションはもちろんのこと、引継ぎや人数的に薄くなってきた部分を機転の利かせた行動力が顕著に表現されてきた。本プロジェクトが縦のつながり、横のつながりといった組織論に基づいた動きが身に付いてきたことが示唆される。

②. 職員 K・S のインタビューについて

職員 K・G は、包括連携協定の締結および北広島 Project の北広島市担当職員である。

北広島市役所職員のなかで、最も北広島 Project の活動を知る職員 K と職員 S に、2 年間の活動についてインタビューを行なった。

Project メンバーとの第一印象について、職員 K は「当初は大学さんから市と何かの連携を結べないかというご提案から始まったもの。これまで 2 つの大学さんと組んできたが、年に数回大学教員が市民に対しての講座開催などにとどまってきた。やるのであればぜひ学生さんが考える、学生さんが主体となって動いていくものをやってみたいと思っていた。」と述べている。この発言から、これまでの既存材料を用いるのではなく、学生が能動的に前に進み、市の考えとより合致した部分を見つけ出し、何かを発信するというテーマを双

方での話し合いの中から浮き彫りにしていくことに迷いがないことが推察される。そこで、職員 K から一つの提案があり「まずは人が集まるところでの催しなどに参加するというものから始めよう」という思いを学生に率直に伝えてくれた。北広島 Project は大学の強み（学びの観点）から、市民とともに活用できるメニューを見つける作業に取り掛かった。

次に、北広島 Project の 2 年間の取り組みについて、職員 S は、「初年度は誰に向けたものなのかー、という部分をはっきりとせず、見つけ出すまでに時間を要したと思うが、2 年目はしっかりと現場（イベント全般）を経験し、見て直接感じていたし、準備から予想も建てられていたと感じた。」と、この 2 年間の大きな成長について述べている。同様に職員 K も「開催したイベント（運動会）が同様のものであり、プレゼンテーションの資料などは大きな変化はなかったが、イベントに向かう顔つきの変化は見違えた。さらにイベント会議や準備段階の所作、佇まいというのか特に 2 年目のメンバーは自信を持ってやっていた」と内面だけではなく、経験と自信に裏付けされた外面的な変化について述べていた。

特に 2 年目の活動について、職員 K は、「9 月のエスコンでのスポーツフェスティバルで実施したロコモテストについて『大学の取り組みをしっかりと組み込み、学びを出せていたし良かった。参加者も改めて数値化したもの、説明を聞いて『なるほど』という雰囲気は漂っていた。』」と、大学の学びを活かした出展内容に第三者的な観点からの評価が得られた。

2 年間の活動を終えた北広島 Project に関して職員 S は「必死感。決して悪いことではないのですが 1 年目はそれが全面に出すぎていたが、2 年目は本当によいバランスを感じさせてくれたチームになった。」と述べていた。2 年目で初めて 1 年生から 4 年生までの全学年が揃い、経験者がうまく潤滑油となりチームを動かした点は北広島市にも十分に伝わっていたことが推察される。職員 K は「冬の運動会はもう参加者が学生さんと時間を共有することを楽しみにしている。そこをうまく継続していくことだと感じる。」と回答し、職員 S は「やらされ感からいつしか学生が中心になって主体的な動きが当たり前に見えてきた。継続していくことが大事。」と述べていたことから、北広島 Project は「継続」がキーワードであることが示唆される。

VII. まとめ

本研究は、学生が能動的学習（アクティブラーニング）を展開する中で北広島市の活性化、支援事業、人材育成、産業・学術・文化の振興に関する一資料を得ることに加え、経年的に学生の汎用的な能力および課題解決能力の向上を検討することを目的とした。

北広島市の活性化、支援事業、人材育成、産業・学術・文化の振興については、活動報告に記載の通り、「地域の運動会」に加え、ブース出展、ロコモテストを実施し、年間を通じて能動的学習（アクティブラーニング）を展開することができた。

経年的な学生の汎用的な能力および課題解決能力の向上については、質問紙調査の結果から継続メンバーの回答に違いが確認された。

北広島 Project 2023 メンバーによる回答を参照すると、同 Project に期待していた内容

としては、「北広島市について知ること」や「北広島市民との関わりを持つこと」、「北広島市の施設を訪問すること」に集約される（横山ほか，2024）。また、同 Project で挑戦した内容としては、「会議資料の作成」「イベントの企画」「プレゼン発表」に集約されることが窺える。このような状況から、初年度（北広島 Project 2023）では、傾向的に Project メンバー個人あるいは Project チームの活動に帰結するような内向的記述が中心的な内容として見受けられる。その一方で、今年度（北広島 Project 2024）では、前述の記述から外交的記述となっていることが読み取れた。このことから、Project メンバーは、初年度段階においては Project そのものの取り組み方や学び方を探索するような傾向にあったと考えられる。

加えて、インタビュー調査の結果から、北広島市役所の職員 S が「やらされ感からいつしか学生が中心になって主体的な動きが当たり前に見えてきた。…省略」と述べている。つまり、第三者の視点からも初年度（北広島 Project 2023）と今年度（北広島 Project 2024）の Project メンバーの言動に違いを感じていることは明らかであり、北広島 Project が学生の汎用的な能力および課題解決能力の向上に寄与していることが考えられる。

VIII. 今後の展望

包括連携協定を締結してから 2 年目の活動を終えた。北広島市の官民連携に加え、札幌国際大学が有する教育機関の知見や人材(学生)を提供する一つの形を作ることができた。2 年目の活動では、新規イベントの企画に繋げていくことができた。今後は、この形を継続することを基軸に、共同プロジェクトや定期開催イベントを展開することが第三段階であると考えられる。そのなかで双方の関わり方をブラッシュアップし、安定的な展開を継続したうえで、将来的には民間企業も交えた産学官民が共同するプロジェクトに発展させていくことが目標である。

引用参考文献

- 1) 中央教育審議会(2012)新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて(答申). https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf . (参照日 2024 年 3 月 29 日).
- 2) 北海道北広島市ボールパーク特設サイト. <https://www.city.kitahiroshima.hokkaido.jp/ballpark/detail/00130860.html> . (参照日 2024 年 3 月 29 日).
- 3) 溝上慎一(2014)アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換. 東信堂.
- 4) 文部科学省公式 HP. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm . (参照日 2024 年 3 月 29 日).
- 5) 日本アクティブ・ラーニング学会. アクティブ・ラーニング研究 Vol.1 2020. <https://www.jal.jp/>

[//jals2030.net/wp-content/uploads/2020/03/active_learning_kenkyu_Vol.1.pdf](https://jals2030.net/wp-content/uploads/2020/03/active_learning_kenkyu_Vol.1.pdf) .
(参照日 2024 年 3 月 29 日).

6) 日本アクティブ・ラーニング学会. アクティブ・ラーニング研究 Vol.2 2022. https://jals2030.net/wp-content/uploads/active_learning_kenkyu_Vol.2_ver1.0.3.pdf .
(参照日 2024 年 3 月 29 日).

7) 札幌国際大学公式 HP. <https://www.siu.ac.jp> . (参照日 2024 年 3 月 29 日).

8) スポーツ庁 公式 HP.https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop01/list/1372413.htm . (参照日 2024 年 3 月 29 日)